

林 重雄<sup>1</sup>: 漂着船に関わる悲しい祭「手杵祭」  
Shigeo HAYASHI<sup>1</sup>: Teginematsuri, a sad meeting attributed to drift-boat

2003年4月3日、福井県小浜市矢代地区に伝わる手杵祭(てぎねまつり)を見てきた。この祭は福井県の無形文化財の指定を受けており、漂着に関わる祭として、これまでも過去の祭の様子が取りあげられている(石井 1993, 1999)。しかし時代に伴う変化も見られるので現在の様子を報告する。

矢代はJR小浜駅から車で20分ほどの所にあるリアス式海岸沿いの小さな集落である(図1)。祭の由来を小浜市の発行した「わかさ小浜の文化財(小浜市教育委員会編 1989)」より以下に紹介する。

「奈良時代のむかし、矢代浦に一艘の唐船が漂着した。そしてその船には王女と附添いの女臈衆が8人乗っていたが、長い漂流の船旅に身も心も疲れ果て、その上食料もなくなってしまい、言葉も通じないままに、ただあわれみを乞うばかりであった。ところが船中には金銀財宝がどっさり積まれていたために、浦人たちはこれに目がくらんで、杵をもって唐人たちをみな殺しにしてしまった。この悲しい事があって以来、この浦人たちはこれ等ふびんの人々を慰め、天罰を恐れて手杵祭を行ない、平安初期以来全く途絶えることなく受け継いでこの行事を厳修してきたと伝えている。」

こうした悲しい由来の祭は、午前11時に加茂神社の社務所で打ち鳴らされる太鼓の音とともに始まった。社務所に集まった参加者たちはすぐ近くにある観音堂に移動し、酒や肴などの飲食の後、社務所に戻った。そして変装のためのウラジロの葉を円形になるように放射状に頭につけたり、顔に墨どりなどをして準備をした。この準備の際も太鼓が打ち鳴らされ、うたが唱われた。練子と言われる女児たちは着物を着飾って、頭に金袋を着けていた。11時50分に本殿に供え物がそなえられ、12時に社務所から皆が出た。

祭は船出し歌で始まり、先頭には祭を統べる竹棒を持った大禰宜(おおねぎ)、次にウラジロを頭に着け顔に墨どりをして手杵を持った棒振り1名、同じくウラジロを頭に着け顔に墨どりをした矢持ち2名(この3名は船を襲った村人役)、それに続いて子観音ののぼりを立てた唐船を持ち袴を着た6名(この唐船は漂着した船を意味している)、ウラジロを頭に着けた太鼓持ち2名と太鼓打ち1名、その後に笹持ちの男児1名と練子の女子3名が続いた(練子は漂着船に乗っていた身分の高い女性と付き添いの女臈衆の役)。なお大禰宜、笹持ち、練子以外の参加者は裸足であった。

社務所から出た行列は、時計回りにお堂の前から本殿の裏を回り社務所の横に戻ってきた。まず大禰宜が全体を見渡せる場所に位置し、棒振りが本殿の前からお堂を中心として時計回りに走りながら杵を使って地面に半円を描いた。そして次は左回りに手杵を振りかざして走って元の位置に戻った。続いてお堂の正面まで進み、手杵を振り回すしぐさの後、手杵を両手で高く掲げた後に前方に放り投げた。次は二人の矢持ちが、お堂の正面で互いに矢を上下に動かし構えるしぐさをした後に一礼した(図2)。この棒振りや矢持ちの所作は、船を襲い殺戮を行なうが、手杵を両手で掲げた後に放り投げたり、一礼することで後に後悔していることをあらわしているのであろう。

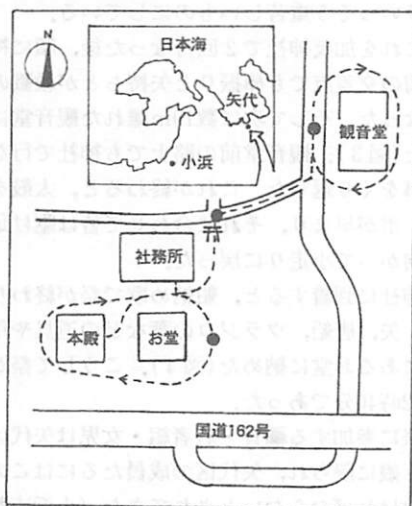


図1. 矢代区・加茂神社付近概念図。行列の経路は破線で示してある。破線上の矢印はその場所における進行方向を示している。往復の経路にあたるには矢印が示していない。●は棒振りと矢持ちとが殺戮の所作を演ずる場所である。



図2. 加茂神社の境内で、矢で殺戮の様子を演ずる二人の矢持ち。

その後、棒振り、時計回りに本殿の後ろを回り、それに矢持ち、唐船持ち、太鼓、笹持ち、練子の順で続き最初の位置に戻った。棒振り、矢持ちの動きが大きいのに対して、その後続く行列は動きも無く続いて歩くだけで、その対比とともに、単調な太鼓のリズムがこの祭をよりいっそう重苦しいものになっている。

これを加茂神社で2回行なった後、順に神社を出て神社前のお堂でも棒振り、矢持ちとが殺戮の所作を1回行なった。そして次に数10m離れた観音堂に行列は移動した(図3)。観音堂前の路上でも神社で行なったのと同じ事をくり返した。これが終わると、太鼓を打ち鳴らすテンポが早まり、それに合わせて皆は駆け足で加茂神社に向かって小走りに戻った。

神社に到着すると、船納め歌で祭が終わり、太鼓、手杵、矢、唐船、ウラジロの葉などの道具や用具を本殿の前にあるお堂に納めた(図4)。こうして祭が終わったのは12時40分であった。

祭に参加する禰宜・若者組・女兒は矢代区の戸主、長男、娘に限られ、矢代区の成員たるにはこの役儀を必ず経なければならぬとされてきた(小浜市教育委員会編1989)。祭の後で、参加した方から話を伺ったところ、笹持ちは4人、練子は8人必要で合計25人で行なうが、子供が減っていて今年は笹持ち1人、練子3人でしかできなかったそうだ。このようにここ数年、子供の参加者の確保が難しくなり、参加者の高齢化もあって祭を続けて行くのはなかなか大変だとのことであった。子供の確保のために矢代地区だけでなく、この地区の出身者の子供にも頼んでいるのが現状だが、こうした村が背負った漂着船にまつわる悲劇を後々の子供達に伝えることは大切なことであろう。

時代の流れから祭礼の日が日曜に振り替えられている昨今だが、手杵祭は毎年4月3日に行なわれており雨天決行といわれている。

矢代地区にはJR小浜駅からタクシーで20分ほど、またバスも運行している。なお、矢代地区近辺には、コンビニなどは無かったが、この地区は民宿が多く、宿泊には困らない。

祭の終わった後で、集落を抜けて海岸に出てみた。狭い海岸には、韓国や中国からの漂着物が打ち上げられていた。浦の端から伸びる港の突堤の先端から集落を眺めると、切り立った山の斜面の下にある狭い所に矢代の集落は軒を連ねている。漂着船の悲しい出来事がおきた昔も今も雰囲気はそんなに変わらないように思え、胸が重くなった。

謝 辞：いつも御指導を仰いでいる石井忠氏(漂着物学会・会長)には文献、資料について大いに便宜をはかっていただいた。ここに厚くお礼申し上げる。

#### 引用文献

- 石井 忠、1993. 日本海沿岸の漂着物。海と列島文化 別巻 漂着と漂流・総索引. pp84-85., 小学館, 東京。  
 石井 忠、1999. 手杵祭。新編漂着物事典. pp259-261., 海鳥社, 福岡。  
 小浜市教育委員会編。1989. わかさ小浜の文化財。168p., 小浜市, 福井。

<sup>1</sup> ウキウキ研究会 〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町3-175 <sup>1</sup>3-175 Toriimatsu-cho, kasugai-shi, Aichi, 486-0844, Japan



図3. 唐船, 太鼓, 笹持ち, 練子と続き観音堂へ向かう行列。

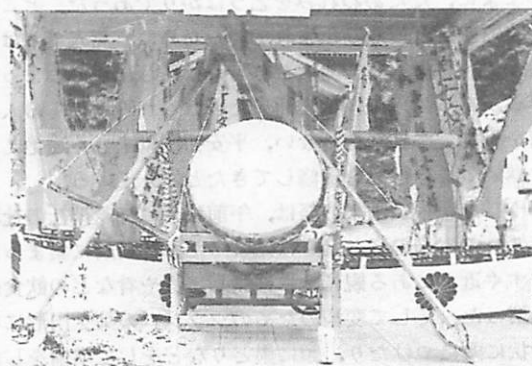


図4. 祭が終わり加茂神社のお堂に納められた太鼓, 手杵, 矢, 唐船, ウラジロの葉。